

「菜園家族」創出の歴史的意義

—資本の自己増殖運動の側面から—

伊藤 恵子

(大阪大学・立命館大学非常勤講師)

はじめに

差し迫る地球環境の破局的危機

貶められる人間の尊厳 ～非正規雇用（38.2%）と失業者の増大、自殺者年間3万人超（1998年から14年連続）～

「環境の時代」と声高に叫んでも、その同じ口から浪費を奨励しなければ立ち直れない、市場競争至上主義
「拡大経済」の深刻なジレンマ

賃金労働者という人間の社会的生存形態を暗黙の前提に組み立てられた近代社会の末期的事態

18世紀イギリス産業革命以来拘泥してきたパラダイムの根本的転換を

I 「菜園家族」構想の歴史的必然性

資本の自己増殖運動とその従属的地位に転落した科学技術

資本とは、自己増殖する価値の運動体である。できるだけ多くの剰余価値を生み出し、その剰余価値の内からできるだけ多くの部分を資本に転化して旧資本に追加し、絶えずより多くの剰余価値を生産しようとする。資本は、市場の競争過程において自己の存立を維持するために絶えず生産規模を拡張し、生産力を発展させなければならない。それは、資本の蓄積によってのみ可能である。結局、資本の所有者は、価値増殖の「狂信者」にならざるを得ない。

こうした価値の自己増殖運動の中で、技術は大きな役割を担うことになり、それがかえって資本に対して従属的な性格を強めていくことになった。特に現代においては、技術的優位性が国内外の市場での競争力強化と超過利潤獲得の重要な要因となっている。技術が科学との結びつきを強め、抽象的かつ複雑高度になるにつれて、また、資本の集中の進行によって技術独占が強固になるにつれて、技術開発や技術移転は組織的計画的活動なしには困難になっていく。科学技術はますます巨大資本に集中し、独占されていく。

こうして、科学技術はいつの間にか本来の使命から逸脱し、経済成長の梃子の役割を一方的に担わされる運命を辿ることになった。科学技術は市場原理と手を結ぶやいなや、人間の無意識下の欲望を掻き立て、煽り、一挙に暴走をはじめ、ついには計り知れない惨禍をもたらす。3・11フクシマ原発事故は、その象徴的な事件であった。

「浪費が美德」の市場原理至上主義「拡大経済」社会

賃金労働者という近代が生み出した人間の社会的生存形態を前提にする限り、企業が窮地に陥れば、企業に雇用された労働者も同じ運命を辿ることになる。しかも、消費も生産もともに絶え間なく拡大させ、その需給のコマを絶えず円滑に回転させなければ不況に陥るという宿命にある。市場原理至上主義「拡大経済」の社会のほとんどすべての人々は、この「悪因縁の連鎖」につながっている。こうした社会にあっては、浪費は美德として社会的にも定着していかざるをえない。

最先端の科学的知見と技術を独占する巨大企業は、それらの粋を動員して、新奇な商品の開発に邁進したり、些細なモデルチェンジをひたすら繰り返す、使いこなせないほどの多機能化をはかったりすると同時

に、テレビのコマーシャルや新聞などの広告によって人間の好奇心や欲望を商業主義的に煽り、強引に需要をつくり出していく。このように「つくり出された需要」を絶えず生み出し、需要と供給の回転ゴマを回すために、イノベーションと称して科学技術は動員され、歪められてきた。

GDPの内実を問う ～経済成長至上主義への疑問～

こうして市場に氾濫していく商品の中には、程度の差は様々ではあるが、人間の生存にとって本当に必要かどうか疑わしいもの、それどころか危害や害悪すら及ぼすものも少なくない。リニア新幹線などますます超高速化する運輸手段ばかり。首都圏直下型地震の危機迫る中でも、人口分散化の発想とは全く逆に、再開発によってなおも人口集中を促す巨大都市ばかり。巨大空港・港湾施設、未来都市スマート・シティ等々、巨大パッケージ型インフラばかり。果てには人間を殺傷する巨大武器体系（陸上の軍事基地施設から海上、宇宙空間にも及ぶ）ばかり。

だとすれば、一年間に生産された財やサービスの付加価値の総額を国内総生産（GDP）とするその内実は、様々な疑問や問題点を孕んでいることになる。GDPには、人間にとって無駄なもの、不必要なものどころか、人間に危害や害悪すら及ぼすもの、自然環境の破壊につながる経済活動や、人のいのちを殺傷する武器生産など、これら生産活動から生み出される莫大な付加価値も含まれていると見なければならぬ。

このように考えてくれば、経済成長のメルクマールとされてきたこれまでのGDPに基づく成長率には、もはや前向きで積極的な意義を見出すことができないのではないか。それどころか、皮肉にもある意味では、市場原理至上主義「拡大経済」社会という名の、いわば人間のからだの内部に発症した癌細胞の増殖と転移の進み具合を示す指標としての意味しか持ちえないことにもなりかねないのである。

戦後高度経済成長によって歪められた国土の人的、物的資源配置構造と地域社会

高度成長による資本と労働の歪められた蓄積構造 ～資本の自己増殖運動による～

大地から切り離された「根なし草」人口の爆発的な増大

～近代固有の人間の社会的生存形態（＝現代賃金労働者家族）～

戦後一貫して進行した農村部から都市への人口移動

～農山村の超過疎高齢化と都市部の超過密化、巨大都市の出現～

地域社会を根底から揺るがす家族固有の機能の衰退と喪失

森と海を結ぶ伝統的な流域循環型地域圏^{エリア}の崩壊

II わが国独自の近代超克の自然循環型共生社会の提起 ～「菜園家族」構想～

週休2 + α 日制のワークシェアリングによる三世代「菜園家族」の創出

～賃金労働者と生産手段（必要最小限度の農地・生産用具など）との「再結合」—近代超克の決定的槓杆～

21世紀の新しい人間の社会的生存形態「菜園家族」～二重化された人格（賃金労働者+農夫）～

「菜園家族」を基調とするCFP複合社会^{*}の形成

※ 資本主義セクターC（Capitalism）、家族小経営セクターF（Family）、公共的セクターP（Public）。

Cはきわめて厳格に規制され調整された資本主義セクター。Fは週休2 + α 日制のワークシェアリングによる三世代「菜園家族」を主体に、その他非農業基盤の自営業（＝「匠商家族」^{しょうしょう}）を含む家族小経営セクター。Pは国や都道府県・市町村の行政官庁、教育・文化・医療・社会福祉などの国公立機関、その他公共性の高い事業機関および国有・公有の事業体、各種協同組合やNPOなどから成る公共的セクター。

「菜園家族」を育むゆりかごとしての森と海を結ぶ流域地域圏^{エリア}の再生

「匠商家族」^{しょうしょう}と地方中核都市の新たな役割

Ⅲ 「菜園家族」の創出は具体的に何をもちたらすか

「菜園家族」を基調とする抗市場免疫の自律的地域世界の構築

「菜園家族型ワークシェアリング」による従来型職場の雇用拡大 ～「短時間正社員」の確立～
人々の家族・地域での滞留時間の飛躍的増大 ～創造的で自由な人間活動に道を拓く～
風土に根ざした、自給自足度の高い抗市場免疫の自律的「家族」・「地域」の形成
剰余価値の資本への転化メカニズム（資本の自己増殖運動）の抑制 ～いわゆる脱成長の「定常社会」へ～
巨大資本の質的变化、縮小・分割・分散の道（＝資本の自然適行的分散過程）がはじまる

自然循環型共生社会にふさわしい「新たな科学技術体系」、「新たな文化・芸術」の生成・進化

これまでセクターCの企業等にほとんど奪われていた人々の時間と知恵と力は、家族と地域の「場」に重点的に注がれる ～草の根の人々による近代超克への本格的始動～
地域本来の自然的・人的・文化的潜在力が最大限に生かされ、自然に融和した、精神性豊かな人間形成、地域づくりが可能となる
科学技術の巨大資本への集中・独占の抑制と、新たなその質的転換 ～農林漁業、伝統工芸・民芸の素朴で細やかな技術体系や知恵の再評価と、地方に分割・分散される旧来の「高度な」科学技術との融合— E・F・シューマッハー『スモール・イズ・ビューティフル』の「中間技術」の具現化～
「菜園家族」・「匠商家族」が担い手となる自然循環型共生の「新たな科学技術体系」、「新たな文化・芸術」創出の時代へ

まとめ ～「菜園家族」創出の世界史的意義～

こうした可能性を確実に保障する現実社会における局面は、紛れもなく森と海を結ぶ流域地域圏^{エリア}を舞台に構築される「菜園家族」を基調とするC F P複合社会のC、F、Pの3つのセクター間の相互作用の展開過程にある。特に 21 世紀の新しい人間の社会的生存形態である「菜園家族」の創出それ自体が、剰余価値の資本への転化のメカニズムそのものを狂わせ、「資本の蓄積・集中・集積過程」を抑制し、資本主義を根底から揺るがすものになっていること。つまり、社会の基礎単位である「家族」そのものを労・農一体的な新たな家族形態へと一つひとつ時間をかけて改造することが、資本の自己増殖のメカニズムを次第に衰退へと向かわせ、その結果として、「資本の自然適行的分散過程」を社会の土台からゆっくりと着実に促す決定的に重要な契機になっていることに刮目したい。

それはとりもなおさず、18 世紀イギリス産業革命を起点に成立した資本主義二百数十年におよぶ生成・展開の歴史過程において、おそらくははじめて、現実社会のさまざまな分野における広範な民衆一人ひとりの努力からはじまる、一見些細で何の変哲もないこの「菜園家族」創出という日常普段の地道な人間的営為が、結果的に市場原理に抗する免疫を自らの内につくり出し、資本主義そのものの崩壊過程を社会の基底部から確実に準備し、促進していくことを意味している。そこに、近代を根底から変え、歴史を大きく塗り替えていくその世界史的意義を見出すことができる。それは同時に、この自然循環型共生の未来社会の成立を保障するだけにとどまらず、その内実をいっそう豊かにしていく重要なプロセスにもなっている。

イギリス産業革命以来長きにわたって一貫して資本の自己増殖運動に寄り添い、精密化・複雑化・巨大化を遂げ、ついにはフクシマ原発の苛酷事故を引き起こし、母なる自然を破壊し、人間社会をも狂わせ、人々を破局のどん底へと追い込んだ現代科学技術とその思想は、やがて自然の摂理、つまり自然界の生成・進化のあらゆる現象を貫く「適応・調整」の普遍的原理（＝自己組織化）に則して、自然と人間の再融合の可能性を大きく切り拓く「新たな科学技術体系」、「新たな文化・芸術」、そして新たなその思想に席を譲っていくことになる。

◇ 論文「脱近代的新階層の台頭と資本の自然適行的分散過程」（伊藤恵子、『立命館経済学』第 61 巻第 5 号、2013 年 1 月）を参照されたい。